

八犬伝、〈親兵衛第一物語〉における〈成長〉について

井上啓治

序

- I、〈親兵衛の成長〉を論ずる意味
- II、稚気昂ぶりと傲慢
- III、馬琴の作意、〈高慢〉の極致
- IV、〈無常観〉と挫折と成長
- V、孝嗣・政木との出会いと成長
- VI、四義侠との出会いと成長

序

かつて、親兵衛像には違和感があると述べた。^(注1) 超人的で「特権的存在」(川村二郎氏)ゆえに、ややもすれば親兵衛物語がつまらなくなる、ということとは別の事である。この違和感の問題を解くには、毛野の場合と同様、〈親兵衛の成長と完成〉というテーマ設定を要すると考えている。

さて、大八ではなく、犬士としての親兵衛初出は、第九輯上巻総末尾、第百三回の最末尾である。筆者は、第九十七回から百二十二回までの〈房総・両国、素藤・妙椿、親兵衛・孝嗣物語〉とでもいうべきものの内、親兵衛登場以前の素藤・妙椿譚を除いた第百四回(百二十二回までを〈親兵衛第一物語(登場譚)〉とし、続く【結城法要、八犬具足・里見招会、小団円】を経て京師へ向かうまでを〈親兵衛第二物語(成長譚)〉、親兵衛の超人的活躍の物語【京師の「話説」を〈親兵衛第三物語〉、帰国間に合って僅かに〈対管領関東大戦〉に参加して以降を〈親兵衛第四物語〉と現在考えている。

その犬士として初登場の場面第百三回末尾・百四回、少年親兵衛像の描写には違和感を抱いた。その原因は、〈驕り高ぶり〉であった。「ただに〈仁の少年〉、つまり驕り高ぶりなど微塵も見せぬ、強さと〈謙虚さ〉を共に備えた妙なる〈理想の少年〉として」登場するという期待を裏切っているからだとした。登場するや、ただちに

里見老侯を救い、並々ならぬ強さを示し、伏姫神女に育てられたを語り、特別の犬士なるを読者に即座に認識させる。ところが頁が進むほどに、〈稚氣〉や、初めて世に出たゆえの〈昂り〉などを越えたものを示してゆくのである。

そして、この違和を念頭に置きつつ、親兵衛の像に関わる行為と、馬琴による言表の内、主要なものをとりあげ論じてみるとして、第百四回、里見老侯初代義実との対話において示される、伏姫神女による〈仁論〉をとりあげた。その結果、〈親兵衛第一物語〉冒頭に女神の〈仁論〉を語らせることの意味は、親兵衛のちに大きく成長するにあたっての前提と目標、仁の性（本質）と用（働き）、具体的には、①人間が天の如き仁に到ることの難さ、②親兵衛も完全ではなく、「天」のように「仁」に振る舞うことはできぬこと、③今後の親兵衛の〈不殺博愛の仁〉の実践、この三者の言表化と予告であったと考察した。この③は、第三部【関東大戦】に到るも貫かれ、〈里見の仁〉として描写されてゆく。おおよそ以上の如く論じた。

I、〈親兵衛の成長〉を論ずる意味

さて、上記拙稿での結論的考察①②③は、〈親兵衛の成長〉を論ぜんという問題設定に、如何ように関わろうか。①と②は、人間と親兵衛の不完全性を語るものであったと思われる。一人歳大きく離

れて若き親兵衛の初登場にあって、その①と②を本人と読者に説き示すは、自然でもあり、かつは用意周到であったといえよう。

また、馬琴内部における八犬士像の画定構想において、〈成長〉も必然であったといえるのではないか。これまで、他の五犬士に比して歳若き少年犬士毛野に、〈成長と完成〉の視点を導入することによって、智の犬士毛野像・第三部前半【対管領関東大戦】、ひいては八犬伝全体、これらに関わる馬琴の思想と構想について、考察と結論を示すことができた。^(注2)今ここで、更に毛野より歳離れて若き親兵衛に、毛野の場合と同様、〈成長と完成〉の視点を持ち込むことによって、毛野の場合同様に、多くのものを明らかにすることができるのではないか、そう考えるのである。

そのためにも、一つ一つ親兵衛登場場面をとりあげ、描写による親兵衛の行為、即ち行動・台詞・内部世界、他者の台詞による親兵衛に対する批評、語り手の語りや作者としてあからさまに顔を出した馬琴による批評、他者と親兵衛の行為の相関による関係性といったものを明らかにし、もって親兵衛像を考察し、八犬伝の世界観等を論ぜねばなるまい。早速、親兵衛登場場面をとりあげてみよう。

II、稚氣昂ぶりと傲慢

犬士親兵衛の初出場面は、既に論じた。^(注3)上述したように、伏姫による〈仁論〉であった。親兵衛と馬琴にとって、〈全き仁の不可能

性と、それでも仁の不可避性」とは何なのか。課題は大きい。

さて、馬琴の言う「房総の話説」は、第九十七回に始まるが、それは二度にわたる親兵衛と素藤・妙椿の闘い、及び、その間の〈準大士孝嗣物語〉や、民間の〈四義侠・親兵衛出会譚〉を指すだろう。ここでは、初出場面（第百三回末尾）、親兵衛・里見出会譚に続く、第百六回半ばよりの様相を見てみよう。照文ら側近集まり、次丸君より里見老侯へ献上の駿馬のことが言上されるや、間髪いれずに「親兵衛找み出で」て、

願うはそのおん馬を、小可に貸し給いね。今より館山へ騎り走らして、立地に御曹司を、拯い取り奉らん、
和朗一個ゆきて、成すことあらんや

と制するのであった。むろん、若武者らしい張り切りぶり、また初陣を急ぐ気持ち、昂ぶりを示しているのだが、それにしても里見二代「義成が大軍ですら、動かしがたき勅敵」に対し、今よりたちどころに救い出しますとするは、やはり驕り高ぶりといえよう。あるいは、増上慢の揚言という方が当たっている。

更に、その駿馬「青海波」について問われた親兵衛は、かつて聞いたことがあるとして、長々と相馬論を語り、己の観察と批評を述べる。

なれどもこは外飾にて、世に稀なるを愛づるのみ。良馬と做すに足らざるか、と阿容たる気色もなく稟し

たのであった。天才少年の世間知らずで、稚気満々の、まことに放言にも近い言いざまではあった。里見は「駭き感じ」て、あっぱれ「要ある才子かな」と、馬を親兵衛に与えるのであった。

親兵衛が見事に技・力などを見せ、驕り高ぶった言動を示し、それを里見や家臣らが感服し、誉め称えるという構図である。この構図はこのちも繰り返されてゆくこととなる。だが、読者はもはや驚かぬ。初発の段階で、童子ながら大柄で、刺客らを圧倒して老侯を救い、尚、道義道理の論さわやかに名弁するを見せられ、更に女神に護られ山中に育てられたこと、あるいは女神の語る〈仁論〉の中で〈不殺博愛の仁〉の体現者になってゆくこと、かつは里見の語る〈一仁先行〉説等を、これでもかと読者は聞かせられたのであるから。即ち、読者は何れも親兵衛の特別性・別格性を強く刷り込まれているゆえ、誰も親兵衛の〈異常性・超越性〉と〈高慢〉ぶりに対し、疑問を持たぬのであろう。そして、大人ならば傲慢とさえ思われるような態度にも、子供らしい稚気満々の姿として、好感さえ抱く読者も多かったかもしれぬ。〈どうも謙虚さを備えた理想の少年とは何か違うなあ〉、などと考える読者は少数であったやもしれぬ。

そして、馬琴はこの初登場の段階第百六回・百七回で、親兵衛の超越性を証明してしまう。再び親兵衛は老侯に言上する。

我が君、願うは小臣に、権且暇を賜いねかし。恩賜の馬に乗り走らし、今より館山へ赴きて、御曹司を拯い取り奉り候はん

と。すると、お前は「庸人つねひとならざれ」どもと言いつつ里見は前回同様おぼに憚るを制し、祖母妙真たねまことに対面させんとする。しかし、親兵衛はその言を「听きかず」、おおよそ左の如く主張する。

賢慮けんりょまことに道理です。それを童子の生賢せいけんしげに御決定に背くは罪がましく畏れ多いことですが、古語にも、「兵は拙速を貴ぶ」と聞いております。長い時間をかけて計謀を巧みにするのは良くありません。今すぐに敵のもとへ行くのでなければ、味方の機密を敵に知られる時間を与えてしまいます。それがしも祖母に對面するを急がぬわけではないですが、それは〈私〉の恩愛おんあいのことにすぎず、家臣たる者のすべきことではありません。痛ましいことに御曹司は……神女も示教しきょうで、快く義通御曹司を救えと宣のたまっておられましたのに、ここで一宿して今夜一晚を無駄に過ごすことはできません。お許しあらば「公私の大幸」これに過ぎるものはありません。いかにいかに。

と詰め寄るのであった。里見も肯かざるをえず、二人の伴を連れ、礼服を借りて出立することとなる。国主の使いと称してどういう策をとるのだと問われるや、親兵衛は、

機かに臨まみ変かに応じて、術すべはいくらも候わん。目今ただいまここに二云かにか々と、安定さだかにはいいがたかり、

と、語ることを拒否する。理詰めり詰めの言葉で救出に行くを承知させたが、作戦を尋ねれば、〈臨機応変でゆく。作戦はいくらでもあろう。今ここで策はこれこれこうだとはっきりと言うことは難い〉と。要

するに、ただ自分を信ぜよ、自分なら何とかなるというのである。何という傲慢、増上慢じやうじやうまんであろうか。だが、里見も読者も既に期待感が高まっている。既に成功を信じているのである。

そして、親兵衛の武備着装が美々しく飾って述べられる一文が用意される。まるで『水滸伝』の好漢英雄たちの登場時や戦陣出立時の美文詩詞の如く。更に語り手は、

人品初めに弥増いよいよして、最と長やかなる額髪を、左右へ耳まで振り分けたる、面色おもしろ特に美しく、威いいあれども猛まからず、意気揚々たる打う打たつを、観みる者ひと齊ひとしく一称賛して、憶おぼわらず「耶々やや」と喝采かくさいにけり。

と絶賛する。以上が第百六回で、百三回末尾に初出世して里見と對面を果たした、その日一日一夜の場であった。まさしく特別性であり、常人ならざる像の刷り込みに成功したのだといえよう。それは、続く第百七回、素藤を捕えるという完璧な成功譚として、一度び絶頂を極めさせられる。

Ⅲ、馬琴の作意、〈高慢〉の極致

その第百七回冒頭、親兵衛は与四郎と景能を連れ、館山城門前に到着した。その門前の問答に注目したい。潜り門から入れるとは何事ぞ、国主であるぞ、「礼儀を知らぬ白物しろものかな」と窘こまめるや敵隊長は、童子のくせにと罵って遣り返す時、親兵衛阿々と笑って曰く、

若門聞かずや。古えの、賢しき人の例を思うに、竹内宿祢は、年十四の時、天皇の勅詔を奉り、北陸、及東方諸国を巡察して、百姓の叛けるを治めたり。又日本武尊は、おん年二八にて、熊襲が魁師と聞こえたる、川上梟師を誅し給ひき。また厩戸の皇子饒のときは、生まれながらの聖にて、聡明睿智儔い稀也。又応神の太子、兎道の稚郎子は、髻歳にして智慧広大、始めて百済の王仁們に就きて、天朝漢字の開祖たり。遠からぬ世に迨りては、菅家は五歳にして……後醍醐の八歳の宮……楠正行十三歳……源牛孺……枚挙ぐるに違あらず。……才あると才なきと、人の賢と不肖なるは、老小をもて論ぜんや。

云々と。後半は何れも演劇や俗史で人々に周知の、賢知と勇力で鳴る幼童少年達であるが、前半の「古えの、賢しき人の例」は、注目すべきと思われる。十四の竹内宿祢・十六の日本武尊・生まれながらの聖徳太子・髻歳の兎道の稚郎子。何れも政治・軍事・文化に関する国家的英傑である。この日本古代の賢人・偉人四人を挙げたのである。年令からいって国使とは分に過ぎているとの非難に応えた反論で、史上の例を言ったのだが、ここは馬琴一流の反論の仕方であると思われる。というのも、ここでただちに次のような、過去の印象的な例が想起されるからである。第二輯巻五第二十回末尾、二段下げによる作者自評である。

作者曰く。……或る人側より閲して、難じて云く、信乃莊助等

英智宏才ありというとも、原とは黄口の孺子、その年いまだ十五に足らず。しかるに智辨甚だ卓し。絶えて童子の氣象なし。……予答えていう。しからず。蒲衣は八才にして、舜の師たり。墨子は五歳にして、禹を佐く。伯益五才にして、火を掌り、項橐五歳にして、孔子の師たり。いにしえの聖賢、生まれながらにして、明智俊才、億万人に傑出す。固より夙患の列にはあらず。この他の神童又多かり。……八犬士の如きも、亦これに亜ぐものか。

と。かつて論じた如く、これは中国古代聖王聖賢並みの里見、それに準ずる信乃、それに亜ぐ莊介の〈智〉を言表化するものであった。孔子『論語』の説く〈三知一愚〉説、即ち生知・学知・困知・下愚の説も、それを承継いだと思われる孔子学派（孫の子思とその後学子思学派）『中庸』の三知説、即ち生知安行・学知利行・困知勉行の説も、ともに生知を上知としていた。また、何より『中庸』は、

好学は知に近く、力行は仁に近く、（知恥は勇に近し）
（注6）
と言う。この像を八犬伝に求める時、描写によって読者に示されたのは、幼時より刻苦勉励し、九才の第十七回から十九才でついに世に出んと旅立つ第二十六回までの間、学問・武芸に努めるを言表化され、また智・勇・賢・才・博学・智慧・聡察などと繰り返し称揚された、即ち好学・力行した信乃と準ずる莊介両者ということになる（注7）と考察した。

八犬伝第二部列伝部冒頭、犬士信乃と莊介の物語にあって馬琴は、中国古代の神童的聖賢に比した。それは、第一部前半〈建国譚〉における里見の像に接続していた。古えの聖賢は、「生まれながらにして明智俊才、億万人に傑出す。……八犬士の如きも、亦たこれに亜ぐものか」と。建国の英雄里見は、確かに儒教原理的理想像で、古えの聖賢並みであった。安房に着いた少年英雄里見は、確かに〈仁〉と〈智〉を、即ち〈真の智〉を身につけているに近かつた。^(注8)そして、第二部冒頭を延々と飾った信乃こそミニ里見であり、里見に準ずる存在に等しいと考えている。信乃の随伴者として描かれた莊介は、その信乃に亜ぐに等しかった。つまり両者は、明らかに「好学」「力行」の〈智〉と〈仁〉に近き人々であった。

そして今、その両者を上回る、即ち努力・後天的で意識的な学問と修養によって成長する少年像を上回る、生まれながらの知道備徳に近い真の神童聖賢像が出現した。ただし、ここでは中国古代ではなく、日本古代の賢人・偉人（日本古代の聖賢とってよいだろう）を以て親兵衛に比した。信乃の場合の中国古代聖賢像を、親兵衛において日本古代聖賢像に変換した。従って逆に、親兵衛を中国古代理聖賢像に変換して読めば、親兵衛こそ明らかに生知安行・上知の人と、アナロジカルに言うことができようか。何れにせよ親兵衛は、馬琴の繰り返す如く「犬士の首」^(おび)なのであり、馬琴が繰り返し〈八犬平等・同格〉を唱えたにもかかわらず〈別格の犬士〉なのであったと考えられよう。仁義八行すべてを言表化されたに等しい信

乃を上回る存在であった。

しかし、馬琴は聖賢性・神童性を言表化するにあたって、慎重であった。信乃・莊介にあっては馬琴自評の形をとって、客観的に両者の〈中国古代神童聖賢に亜ぐ〉なるを言表した。そして今、親兵衛にあっては親兵衛自身の台詞という形をとって、〈日本古代神童聖賢に等しい〉存在なるを言表した。馬琴の用意は周到であった。〈親兵衛第一物語〉にあって、ここでも親兵衛は自ら語り、自ら誇っていた。即ち、基本的に謙虚な犬士たちの中にあつては、驕りと増上慢に近い言動をする、特異な犬士であつたといえよう。むろん、九歳だからであり、世の中と交わっておらぬからであり、人と相知る経験がないからである。すべては、馬琴の構想であつたと考えているが後述。

さて第七七回。敵に無礼、無作法と非難されようと、「我が君は、是房総の国主也。墓田は原とその麾下の城将」云々と帯刀のまま進み、素藤や重臣、勇士らが居並ぶ書院に着くや、「誑使なれば、勿論上席」と会釈もせず、床の間の鎧櫃を引き出し尻掛け、正面第一の上座に着く。「無慙なる、猴子が狂態……瘋人ならん」と、一斉に襲い捕えんとする。既に素藤憎しとし、天才少年犬士に好感を覚えていた読者は、堂々と弁じ、言葉と身体で場を圧倒してゆく親兵衛に、胸すく思いで感情移入してゆこう。さて、獲り込めんと一斉に襲いかかる時、

那の時遅し、這の時速し、奇なるかな、親兵衛が懐より、一道

の光颯と燦燦として、打ち向かう兵毎の、面を撲地と撻ちし
かば、大家都て眼を射られて

しばしも起きていたことはできなかった。刃向かう素藤を簡単に倒
し、片足で踏み伏せ、捕り縄で緊しく縛ったのであった。

何というとも、余りにあっけなく、拍子抜けの有様であった。そ
して、親兵衛らしさにあふれる独壇場の大演説を始める。注目すべ
き発言・態度と思われる。己を語るところを引いてみよう。

就中我親兵衛仁は、年四の秋よりして、又那の神女の擁護を
蒙り、六稔富山に生育たる、今茲は甫の九歳なれども、見

よ、身長さえ、心術さえ、恠くまで大きうなりたるを、誰か驚
き仰がざるべき。神姿不測、無類の神童、二人と見ること有り
がたければ、結縁のため礼拝せよ。然れば我が、この素藤の、
素生と奸詐をよく知ったるも、身単り誼使に立ったるも、皆是
神女の示教に憑れり。昔唐山なる秦の甘羅は、年十二の童なり
しに、呂不韋に説きて趙に使いし、大功ありしを、司馬遷が、
史記でう書に載せし……：皇國にもこの親兵衛仁あり。その功
甘羅と孰与ぞや。……我又神女の示教に憑りて、仇に報うに徳
をもてして、曼讚信の仁を施さずば、若們生きて、今まで在ら
んや。

まことに庄倒的な像表現ではないか。単に親兵衛の神女による特別
性や、伏姫神女の偉大さを語るものでないことは明らかであろう。

へ見よ、類い無き神童の我を。全員、我を仰げ。二人といた存在

なのだから我を礼拝せよ。この日本国にも親兵衛がいるぞ、中国古
代の神童甘羅とどちらが傑れているか。

もはや、常軌を逸していると思われぬ。稚氣の一言で済ます
ことのできぬものを感じざるをえぬ。増上慢・高慢を超えた異常さ
であり、馬琴の筆の滑りという範圍を超えていよう。高田氏の言わ
れる、実の孫、太郎九歳への投影による理想化という点を割り引い
たとしても、尚尋常ではあるまい。ここに明らかなる馬琴の作意を、
親兵衛像に関する構想を見たいと思うのである。

〈親兵衛第一物語〉前半において、里見老侯救出という、読者を
あつと言わせたデビューの初出以来、順風満帆で、稚氣に満ちては
いるものの驕り高ぶりを示してきた親兵衛に、素藤生け捕り・御曹
司救出という昇りつめた絶頂を用意し、常軌を逸した高慢さの極致
を發揮せしめた馬琴。まことに作為的と考えるのである。

この〈親兵衛第一物語〉前半の像が、続く中半において、どのよ
うな姿をとることになってゆくか、見てみよう。

IV、〈無常観〉と挫折と成長

素藤との最初の闘いを、あっけなく勝利した第七七回を経て、里
見二代義成との対面、及び素藤罪刑決定・追放・妙椿尼との再会と
妙椿による素藤への援助、そして両者による里見への反攻計画が語
られる第百八・百九回のもの、始めて親兵衛に順風ならざる場が訪

れる。第一百回。

稲村城内に妖怪、女の「冤鬼」が毎夜、浜路姫の辺に現れる。役の行者とおぼしき異人に、甲州に居た折の養家の継母淫婦夏曳が、姫を妬み怨んで祟るものゆえ、早く親兵衛を館山城より召し寄せ、所持せる仁の玉を姫の伏す簀子の下に埋め、親兵衛をして病床を褥らしめよと示される。義成に命じられ、親兵衛は答えかねて「沈吟」じ、「肚裏に思う」に、一瞬たりとも人に貸すべき玉ならざるに君命なればと耐える。暗転の始まりである。

幽霊も出なくなり姫も回復と思われた七夜目、義成自ら姫の臥房を訪れる。皆眠りこけ、次の間に宿直の筈の親兵衛は見えず、隣の臥房より男女の囁き声がする。また、姫の手跡で親兵衛に贈った艶書を拾う。怒りを鎮め義成は、これをもみ消し二人を遠ざけんと決め、関八州歴覧と七犬士搜索を親兵衛に命じた。立つ鳥跡を濁さず、潔く出立した親兵衛は、まず祖母妙真との対面に滝田へ向かうのであった。

だが親兵衛は、その時再び「肚裏に思う」のであった。「我を疑うて、追い放ち給うらん……佞人が、讒言をした」のであろう。「功成り名遂げて身退くは、是達人の用心にて、生涯無異の捷徑なる」を誰も知っているのに、つい俸禄富貴を貪って退くことを忘れる。その時は「狷禽尽きて狡兎烹られ、平家亡びて義経讒死」す。栄と枯、得と失とは、今も昔も変わらぬもので、今回自分の身の上起こった件も驚くには足りない、と。しかし、義兄弟の七犬士に

めぐり逢う日の「ありとても、この身に受けたる濡衣を、乾さずばこの地に住まりて、仕え」ることはしないと、胸にかたく決するのであった。

ここまで派手やかに独壇場を示してきた親兵衛に、いったんの寄り道が馬琴によって示されるのである。親兵衛の独白は、意地をも見せるものの、冷静である。しかし、一抹の寂しさと無常観さえ漂わせ、読者の感情移入は深まる。もしそうとすれば、この独白は、一見〈挫折〉のような雰囲気をもとっていると読めよう。

だが、簡単に挫折というわけにはゆかぬ。初登場時、圧倒的な強さで老侯を救い、何の勞することもなく素藤を捕えたことは、読者に対して親兵衛の特別性を認識させるに十分であったが、真の超越性、偉大さを示すには足りなかった。強大な敵に、勞して勝って初めて大功となるのである。従って、素藤は再興し、しかも今度は妙椿を伴って強大になり、妖術を使わねばならぬ。すれば、親兵衛の仁の玉は一度び親兵衛の身を離れざるをえず、また親兵衛も素藤・妙椿が里見に攻め勝つの間、安房を離れねばならぬ。

何よりまた親兵衛は、人に出会わねばならぬ。他の犬士が多くの人に出会ってきたように、彼もまた多くの世の人々に出会い、成長せねばならぬ。かくの如く、展開の構想上、親兵衛は一度び寄り道せねばならなかったのであり、ここは挫折と言うとも〈眞の挫折〉ではなかった。彼は別に直接敗れたわけでもなかった、戦闘においても、計謀においても。ただ、妙椿の妖術を見破れなかった、騙さ

れたのは事実であった。つまり、親兵衛は〈不完全性〉を示したと考えられるのである。これについて、二点論ずることができようか。

その第一点目は、前述した親兵衛初出時、伏姫神女による〈仁論〉の考察の結論、①人間の仁の不完全性、②親兵衛の仁の不完全性、③今後の親兵衛の〈不殺博愛の仁の実践〉予告、これらに関する。最高の徳目、仁の犬士親兵衛であっても、自然界における天のように完全に仁に振る舞うことはできぬとする論であったが、それは親兵衛の犬士として、人としての不完全性を象徴する謂であったと考えている。従って、一度びは妙椿の妖に騙されるのである。

第二点目は、博愛、仁の像に関わろう。かつて、第一部前半〈建國譚〉において、英雄里見は中国古代聖賢並みの、儒教原理的理想像なるを言表化されていると論じた。ゆえに仁君・賢君・君子であった。そして君子なればこそ一度びは騙され、安西に米穀を貸して、逆に翌年不作の時、安西に攻め込まれると考察した。結果、里見は八房犬への「口の過ち」をなし、〈伏姫伝奇〉、八玉八犬誕生、第二部八犬士列伝へと導かれる世界構造となっていたと論じた。^(注10)そして今ここで、仁賢、君子なればこそ一度び騙されるという構図が、親兵衛において繰り返されたのであると言ふことができよう。叛逆者素藤に極刑をという声に対し、〈不殺博愛の仁〉によって命を救った親兵衛は、里見初代と同相であった。仁・賢の君子である。ゆえに騙されねばならぬ。素藤の積極的な騙詐ではなかったが、素藤・妙椿という本来の形となって、博愛・仁の犬士親兵衛は騙されるの

であるといえよう。

さて、〈真の挫折〉というわけではないが、順風に水を差され、寄り道させられる親兵衛。祖母に別れを告げてのち、船で出立の夕刻、彼の靈玉の「寶貝」、埋め置いた筈の仁の玉が跡を慕って飛来する場面、第一百一回。彼は三度び「肚裏に思う」のであった。

^(B) 現に人の榮辱得失は、宛ら一炊の夢に似て、秋の天の瞬間に、晴曇るより猶果敢なし。抑も我が身昨日までは、数百の士卒に將として、館山の城主なりしに、今日は一僕身に従わで、万里の孤客となりけり。

と。ここで「肚裏に思う」は三度びとした。三度とも順風ならざる状況、暗転に即していた。そして、二度目の「肚裏に思う」に続いて三度目のここでも親兵衛は、〈人生の無常〉や〈人の世の難しさ〉を語る so であった。この親兵衛の内部世界の詠嘆・感慨こそ、かつての湯島神社頭における毛野の場合と同様、年少の犬士親兵衛の〈成長〉の象徴・第一段階となるのだと考えている。

毛野の場合は、十九歳の正月であった。十三で身の素性と仇を知り、十五で第一の仇を討った〈毛野第一物語惨殺譚〉。そのまま山寺に引きこもり、十八で下山して世の中を見た〈毛野第二物語〉。そして十九の正月、町の侠客、「心真実なる」人、「性の美」なる人、無学ながら「学ぶに優る世の人の、人の上なる人なりけ」る鯉三を知り、仇討に走って以来の己を初めて省みたのであった。毛野は「つくづく、肚裏に思う」(第八十九回)とあるように、その内部

世界に展開された詠嘆と感慨によって、大きく成長を示したのである。^(注1)更にこの年の十二月、第三部前半〈関東大戦〉において、偉大なる独り軍師として再び大きく成長し、第三部後半において〈完成〉^(注12)すると考察した。

読者に示された毛野の成長は明白なものであった、大きなものであったと言えよう。そして、それは〈毛野第三物語〉においてのことであった。今、親兵衛にあつては〈親兵衛第一物語〉中半であり、大きな成長とはいえぬものであるが、それでも派手やかなデビューの活躍より一転して〈世の無常〉を語るといふ形からして、馬琴によって明白に示された成長だといえよう。

かつて、「ほとんど、苦戦しない。葛藤もほとんどない。この「ほとんど」とは、いくつかの例外を除いて、ということである。そのいくつかの例こそ親兵衛の成長の場である」と述べた。そして今、こここそ、そのいくつかの例外の、最初の一つであったと考えている。派手派手しく登場して順風満帆の親兵衛に、早くも訪れた試練の場、〈人生の無常〉と〈人世の難しさ〉を知って親兵衛は、いくらか成長したのであるといえよう。

そして、素藤・妙椿が稲村城を奪回し、南弥六と安西出来介が謀計によって素藤を討たんとして義侠に死んだ頃(第百十一回〜百十四回)、親兵衛は新たに人を知るのであった(第百十五回)。

V、孝嗣・政木との出会いと成長

〈親兵衛第一物語・中半〉は第百十回、里見義成による親兵衛への疑いと追放に始まり、河鯉孝嗣(後の準大士政木大佐)と政木を知って成長し、〈後半〉は民間の四義侠を知ることで世に交わり世を知り、一段二段成長し、ついに再び安房に帰還して素藤・妙椿を破り、〈玉梓怨霊譚〉を終息させることで〈第一物語〉を終える、と考えている。

さて、その孝嗣との出会いは、第百十五回末尾。越後長尾家の籠大刀自に化けた政木狐(孝嗣の母に命助けられ、その恩返しに孝嗣の乳母となっていた)によって、讒死せんとするを辛うじて救われ、里見領に向かわんとする孝嗣の手並みを試みようとする親兵衛であった。互いに認めて語りあう二人。親兵衛は注目すべき態度を示す。自己を語る場面、第百十六回。

今茲九歳の総角なれども、童年才に四の秋より、伏姫神の擁護により、安房の富山の神窟窟に、人と成りにし甲斐ありて、
心術さえ身長さえ、見らるる像く大人備て、文学武芸も姫神に、伝授せられて、然ばかりの、本事なきにあらざればや、料らずもいぬる比、……寇を夷げ敵を降しし、その功をもて寵用せられて

云々と。ここに高慢・増上慢は既に見えぬ。落ち着いた普通の態度である。第Ⅲ節引用テキストの傍線部④と比較すれば、一目瞭然で

あろう。もう一か所、「寶貝」、「第一の身の衛り、これに優したるものはなし」とする靈玉について語るところである。

我が持てる、玉には仁の一字あり。仁と名告るもこれに由れり。曩に富山を出でし折、^①独り館山の城に赴きて、逆將墓田素藤を生け拘りつ、凶徒を降し城を抜きしも、我が靈玉の威徳によれり。

ここは、自らの功に触れるところでもあったが、自らを誇ることも高慢もまったく見えぬ。更に政木狐（茶屋の老嫗）との機変に関する問答では、

耳新たなる論弁分明、理りならずということなし。^②咱們は及ばず。及びがたし、と誉むる

とされる。親兵衛は、初めて〈謙虚〉な態度をとったのであった。注目すべきであろう。

だが、もっとも注目すべきは、親兵衛の人に対する態度だと思われる。上述傍線部^③、即ち〈高慢・増上慢〉の極致から、第IV節傍線部^④、〈人生の無常〉〈人世の難さ〉の認識を経て、このV節傍線部^⑤の落ち着いた自然な言動を經、ついに^⑥の〈謙虚さ〉に辿り着いたのであったと思われるのである。

それは第百十七回にても見ることができのだが、いささか元に戻る体である。政木狐の靈力で安房の状勢を調べ教えてくれるや、親兵衛は「我が思慮浅くて、今まで悟らず。……始めに劣れる我が智を思えば、憑むは仁字の靈玉のみ」と謙虚な態度をとるのであ

た。しかし、この前後が謙虚から離れる。「腹立たしきは館山なる、三番士們が阿容々々と、果敢なく城を攻め陥されて、一個は敵に生け拘られ、兩個は逃げたる不覚さよ」と、敗れた同僚を誇るのであった。また、たとい素藤が以前に倍して幾千百人居ようとも「又活きながら捉えん事、囊の物を探るより易かり」と、大言壮語するのであった。それを孝嗣は「弁才智勇、金玉成す言」と称揚する。再び闘いに向かうにあたって、馬琴は親兵衛を奮い立たせ、同時に驕り高ぶった言動をとらせる。

ところが、以前と異なり、その態度のままでは済ませなかった。その驕り高ぶる親兵衛に、千歳の靈狐政木は穏やかに、妙椿は姿を消すことができるがどうするのかと問う。親兵衛は、「答え難ねつ沈吟じ」て、教えを乞う。すると、政木は静かに窘める如く教戒する。

然ればとよ、その事なれ。^⑦才も不才も人は各、得たる事あり、得ざる事あり。この故に孔子聖人の、鋤壊える技はしも、老圃に問え、と宣えり。おん身に助言は烏許ながら、龍の路は蛇こそ知らぬ、那の妙椿が幻術を、破りて摘め捕らまく欲せば、先ず他が来歴出処を、具に知らずばあるべからず、と優しく語りかけければ、「親兵衛飲びて、そは亦得がたき珍説ならん。快々听かまく欲しけれ」と応えて膝を找めれば、

孝嗣も亦うち含笑まれて、俱に耳をぞ傾けける。まことに目に浮かぶではないか。驕り高ぶった神童に、智恵ある老

婆がそつと神童の万能ならざるを示し、宥め、穏やかに方策を教えんとする。神童は単純に喜び、早く教えてくれ早く、と急かすのであった。その素直な少年らしさゆえにこそ、孝嗣も自然と微笑んだのであると解しえよう。驕り高ぶる親兵衛を穏やかに宥めた傍線部⑩、政木の言こそ馬琴の重要な作意であったと思われる。

そして政木は、玉梓怨霊・その怨霊の憑いた狸が八房犬を育てたこと・その狸の妬みと怨みによる妙椿狸への変化・妙椿が鬻ぎの玉を入手したこと・妙椿らとの戦闘方法、これらについて語るのであった。親兵衛は歎び、腕を思わず扼し、

⑩ 寔に得がたき有縁の忠告、よく機を査し隠微を明かす、言皆
意表に出ざるを聞く、我が身は今なお富山に在りて、伏姫神の
示現教諭を、承るに異ならず。老嫗は素是異類というとも、そ
の智広大、菩薩に等し。いわるる趣こころ得たり。謹みて明教
に、従わざらんや、従うべし、

と素直な態度で認め、謙虚に振る舞うのであった。傍線部⑩、既に親兵衛は、再び一段〈成長〉したのだと思われるのである。単に政木が偉大で、神格性を持っているゆえのみではあるまい。〈人生の無常〉と〈人世の難さ〉を認識し、異類の老婆の優しきたしなめにより、〈素直さ〉と〈謙虚さ〉を獲得した親兵衛の、明らかなる〈成長〉であったと考えられよう。

だが、これは〈完全なる成長〉であったとは考えていない。今、予め結論を述べておけば、この〈第一物語（登場譚）〉後半におけ

る〈不殺博愛の仁の実践〉と、〈第二物語（成長譚）〉における〈大きな挫折と相対化〉を経て、初めて〈真の成長・完全なる成長〉に到るのだと考えている。

さて、安房の状勢を聞いて出立せんとする二人に政木は、長年の積善陰徳の功により天帝の恩勅を受け、狐龍になって昇天する、別の時が来たと告げ、親兵衛と政木による〈龍論〉が述べられ、見事に龍と化して天に昇るのであった。これを吉兆とみて二人は早速安房へと出発する。両国河原西岸で船出を待つところで、相撲の技を見せて旅稼ぎする、老壮二人の葉売りの主僕を見る（第一百七回末尾）。ここから〈親兵衛第一物語・後半〉第百十八回〜百二十二回が始まると考えている。

VI、四義侠との出会いと成長

さて、その第百十八回と百十九回前半は、この二人、地団太と鯉三を中心に、土地の義侠五十三太・素手吉兄弟、併せて四人の物語である。地団太による〈相撲論〉が展開された後、二人による四手秘術が尽くされる。膏薬を売ろうとするが、土地の親分五十三太に買うなど止められていたゆえ誰一人買おうとせぬを、親兵衛が皆買おうとして五十三太一党と喧嘩になり、懲らしめるという話であるが、これは明らかに『水滸伝』に拠っていると思われる。

ここで親兵衛と孝嗣は、地団太・鯉三と〈相知る〉のである。構

成としては、語り手と地団太による長い長い来し方の説明が述べられ、また第一百九回後半は、地団太らとの問答という形で親兵衛がこれまでのことを説明する。それを盗み聞きしていた里見の使者、蛭崎照文が現れて第二百二十回に入る。素藤・妙椿による館山落城の折、行方不知となっていた里見の家臣、田税たちぎと苦屋の率いる五十三太・素手吉一党が現れ、一党の船で房総へ急ぐこととなる。第二百一十一回、漸く館山城に着き、政木の教示した秘密の地下道の入り口、出口の大石を霊玉によって二つに裂き、城内に討ち入り素藤を捕え、霊玉によりついに妙椿を倒すところへ、里見軍も攻め入り完勝する。そして、妙椿の正体、玉梓怨霊の余怨まとわりつく狸の死骸に「如是畜生発菩提心」の八字現れ、親兵衛の詳しい解き明かしが示される。

かくして、長い長い〈玉梓悪霊譚〉の世界と構造が、ここに完結させられたのであった。そして第二百二十二回、戦闘と城奪回の後始末の場となり、親兵衛は主君里見と会見してからにせよと引きとめられるも、七犬〈招合〉の君命を果たすが先、「七犬士們ちゅうけんしどもと共侶に、帰参は我が宿望しゆくぼう」なりと、政木大全（孝嗣が改名）と地団太・鯉三を連れ、結城へ向かい、飄然と旅立つのであった。

ここまでを、〈親兵衛第一物語〉としたい。その前半・中半における親兵衛の〈傲慢・高慢・増上慢〉ぶり、及び〈人生の無常〉と〈人世の難さ〉を知り、政木老嫗による〈素直さ〉〈謙虚さ〉を示すまでに到るを論じてきた。そして今、この後半においてその親兵

衛像が、如何ようになるのかを検証せねばなるまい。

第一百十八回、親兵衛は孝嗣・政木に続いて再び人を知り、世と交わり、世を知るのである。誰も地団太の膏藥を買おうとしない時、親兵衛は孝嗣とともに進み出て、金を与えようとする、

士しは己を知る者の為に死し、……といえ、知己ちぎとしい思ひ奉る

あなたの賜物を辞すのは、却て人情に疎うといようで無礼に思いますが、その金は多すぎますと断る地団太。親兵衛も即答して意に応える。

君子くんしは断金の交わりあり、路上の人も知音ちいんと思えば、蓋を傾

けて故旧こきゅうの如し。豈あに白頭はくとうまで新たなる、浮薄の交わりに慣ら

わんや

ここに、犬士の頭領たる天才少年と町の老義侠とが、一瞬にして〈相識〉の人となったのであった。〈義侠〉は八犬伝の重要な要素であった。鯉三・地団太に、馬琴は大きな役割と価値を与えた。二人はそれに相応しい出会いをしたのである。しかし、この出会いの場にも五十三太一党との闘いあり、次いで素藤・妙椿との決戦ありで、気は昂揚する。親兵衛も昂揚する。五十三太らに、

鼠ねずみの毎ごと我が名を知らずや。安房の里見の御内人、犬江親兵衛

仁になるぞ。若門わが頑愚、非道の冥罰、本事ほんじを見せて感懲かんとらさん。

其首そのくびな退きそ

と、声高やかに罵る親兵衛は、地団太への自己紹介に、伏姫神女ひめがめの冥助を語った上で、

① 見らるることく、身長みながさえ、心術しんじゆつさえ大人備おとなびしは、仙境餌菓

の故なるべし。

と、驕り・自分誇りもなく、ナチュラルに語るのであった。第三節引用テキスト傍線部④あるいはV節◎と比較されたい。同じ言葉を用いながら、何という違いか。「見」「身長さえ」「心術さえ」「大」と同じ字・句が同じ順に並んでいる。明らかに馬琴の作意であろう。変化を、つまり〈成長〉を意識的に読者に明示しているのだと考えられるのである。

この第百十八回から百十九回まで、四人の、実際にはほとんど地団太と親兵衛二人の直接話法によるものと、語り手による間接話法の説明と問答が続くのだが、そこで読者に印象付けられるのは、地団太・鯉三両者の深い魅力であった。孝嗣・政木を含めたこれらの人々と知り合ったことは、親兵衛をまた一歩大きくさせたのである。その第百十九回。恩人毛野・小文吾・莊介に「環会し給いね」と、湯島の神に「思いう涯りを祈請」する地団太と鯉三。まことに〈義と情に厚い人々〉として描かれる二人に、親兵衛は諸々を説き明かす。それは作者の代わりに語っているのだが、小説作法論も交えたもので、まるで神の目の如くして語るのである。例によって傍で聞く者たちは、大いに誉め称える。そして、四者は互いに互いを語るのであった。

親兵衛は……孝嗣が死を免れし折、……はやく友垣を結びし事、……その崖略を解き示せば、孝嗣も亦漏れたるを補いて、母の慈善と政木の恩義、且つ親兵衛と値偶の縁、毛野道節們七犬士

の、忠あり義あり好情ある、事をし茲にいい出でて、身の薄命をうち不娯れば、地団太と鯉三は、又奇に驚き髀を拍ちて、或は悲しみ或は喜び、或は怒り或はうち笑む、千状万態、みづから禁ぜず、膝の找むを、覚えぬまでに、只顧感じて已まざりけり。

ここに親兵衛は、〈人を知り、世と交わり、世を知った〉のであった。もはや、〈孤独の神童〉ではなかった。〈自ら誇る〉必要などないのである。己が知っている者、〈己を知ってくれる者が側にいる〉のである。そのように努力したのである。やはり親兵衛は、確かに〈成長〉したので考えるのである。

以上、〈親兵衛第一物語〉の前半・中半、及び後半の半ばまでを見てきた。初出の像からの成長は明白で、極端な表現なども馬琴の作為であった。犬士像に関する馬琴の構想の一端を確認した。また、〈第一物語〉も大方は確認した。残るは〈不殺博愛の仁の実践〉であるが、続稿に期す。

注

1、抽稿「八犬伝、親兵衛論序説」〔横山邦治先生叙勲ならびに喜寿記念論文集 日本のことばと文化〕、溪水社、平21。

2、抽稿「八犬士論のための序論、毛野の成長」〔就実表現文化〕3号、平20・12)、及び「八犬伝第三部、毛野の成長と完成」〔就実論叢〕38号、平21・2)。

- 3、注1に同じ。
- 4、底本は新潮日本古典集成別巻『南総里見八犬伝』全12巻（濱田啓介氏校訂、平15・16）を用い、引用に際してはルビを省略したり、送り仮名、旧字体を改めるなど、読み易いように適宜直した。
- 5、この点については拙稿「八犬伝と孝経・論語と史記―第一部 里見の聖賢像と『封神演義』太公望像をめぐる―」（『復興する八犬伝』、諏訪春雄・高田衛氏編、勉誠出版、平20）を参照されたい。
- 6、『中庸』は段落分けもばらばらゆえ、ここでは三十三章に分けた朱子『中庸章句』に拠ることとするが、引用該当部は第二十二章にあたる。また、この引用部の「知・仁・勇の三徳」の像については、拙稿「八犬伝の根底世界」（『就実論叢』36号、平19・2）を参照されたい。
- 7、拙稿「八犬伝、毛野の〈智〉と人性観・教育観」（『就実表現文化』2号、平19・12）。
- 8、注5に同じ。
- 9、ミネルヴァ日本評伝選『滝沢馬琴』、ミネルヴァ書房、平18。
- 10、父里見の聖賢像と「口の過ち」の構造については注5論文を、〈伏姫伝奇〉と世界観・世界構造の関係については拙稿「八犬伝第一部後半・伏姫像二様と異類婚姻譚」（『近世文芸 研究と評論』77号、平21・11）及び「八犬伝第一部、〈伏姫伝奇〉論」（『就実表現文化』4号、平22・1）を参照されたい。
- 11、注2の両論文の内の前者。
- 12、注2の両論文の内の後者。

